

令和4年度 調布市立若葉小学校 学校評価報告書（学校長 生田目 将）

学校の教育目標	
『かしこく やさしく たくましく』	
○しっかり考え、進んで学ぶ子：確かな学力 何が重要か判断する力 自ら問いをたて、よりよく解決できる力 論理的思考力 情報活用能力 既存の価値観にとらわれず、自分の考えを発信できる力（ESD/SDGs）	
○思いやりのある子：多様な人々と協働できる力（多様性・平等性） 合わせる力（相互性） 正しい人権感覚 ・あいさつ コミュニケーション能力	
◎ <u>明るく たくましい子</u> ：体力 学び続ける力 レジリエンス 挑戦する力	
目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像, 教員像, 児童・生徒像	
持続可能な未来を創造する子どもたちの育成：夢をもち、未来を切り拓く力 「子どもたちの笑顔があふれる学校」「教職員が子どものために生き生きと働く学校」「保護者・地域が子どもを通わせたい学校」 キーワードは～今よりもっと笑顔があふれるために、『たい』が泳ぐ学校づくり～ 「わかる・かかわる・はい、できた！」	

調布市立学校における共通した領域 <短期的な経営目標>

	1 豊かな心(徳)	2 確かな学力(知)	3 健やかな体(体)
自己評価	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組
	①授業や行事を通して、良好な学習集団をつくる。	①「わかる」「はい、できた」の実践 「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」「何ができるようになるのか」の意識化。	①体育健康教育の推進 東京都及び調布市の研究推進校をうけて、児童の体力・健康意識の向上、授業力向上。
	②多様性を受け入れる学校	②「かかわる」の実践	②東京 2020 レガシーの充実
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)
学校関係者評価	①学校が楽しいと答えた保護者は90%を超えた。児童は80%弱となったが、授業中の話し合いや学び合いを90%以上の児童が肯定的にとらえているため、良好な学習集団づくりへの取組は一定の成果が表れている。	①授業の導入時にめあてを児童と共有し、終末に振り替えることを全授業でほぼ実施できている。前年度までの研究成果である思考ツールの実践活用の継続は維持できたが児童アンケートの結果からは推進に至らなかった。	①体育の授業が楽しいという児童は90%を超えている。自分の健康についての知ろうとする児童は90%を下回った。
	②関係者評価からは命の教育の授業等、保護者からは多文化理解の授業等で児童と教職員の人権感覚の醸成にかかわる取組を評価してもらえた。児童も学校は規則等を丁寧に指導していると評価している。	②自己の考え構築のためにワークシート等の活用(主体性)、ペア、小グループの実施(かかわり、他者意見、クリティカルシンク)などに関しては、90%以上の肯定的評価を得ている。	②アスリート招聘(3回)や国内外のスポーツイベントに関する発信(委員会等の児童活動)後の感想文などから児童の経験と興味を沸かせることができたことがわかる。
	教員の肯定的な言葉掛けが印象的である。「～してはいけない。」ではなく「～しましょう。」と投げかけることで、子どもが自ら考え、判断し、主体的に行動することができていると思う。 個の学び→ペアやグループでの交流→全体での発表・共有といった授業展開から他者の意見を聞き尊重する機会が小学校のころからあることは、大変貴重なことと感じている。 今年度全学年で行った外部講師による心と体に関する授業のように、多様な価値観を受け入れ、共生する素地を養うような学習を今後も大切にしていきたい。	子どもたちは「できる」、「わかる」ことで学習の楽しさを感じる。学習の理解度には個人差がある。教員による授業展開の工夫には頭が下がるが、地域人材・ボランティアの活用等、環境の整備も広がるとよい。 先生と子どもの関係が固定化されることにより子どもが安心して生活を送ることができるようになるが、教科担任制や交換授業のように様々な指導者が授業を行うことも、子どもにとってよい刺激になるものと思う。 子どもと保護者の評価に開きがあるので、教員は一層子どもの実態把握に努めることで、効果的な指導に努めてほしい。	現在の校庭及び体育館の環境下で、保護者と子どもたちがより充実感・達成感を感じられるような取組が必要と思う。 体育は教員の指導力の差が生じやすい教科と感じる。研究推進校で得た成果を子どもたちの指導に生かし、子どもたちの健康習慣の確立や体力の向上を目指してほしいと思う。 全国及び都の体力テストの結果から基本的な動作(走る・投げる・蹴る)の習得や運動経験の不足が懸念される。地域の高校生や運動経験者からの指導等、有能な地域人材を発掘・活用してほしい。

学校の特色を生かした領域 <短期的な経営目標>

	4 特別支援教育の推進	5 連携の推進	6 特色ある教育活動の推進
自己評価	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組
	①校内委員会の組織化活性化	①第四中学校との連携	①スポーツ大会の充実 新感覚と従来の内容の復活による融合
	②就学支援シートを活用するとともに、「個別指導計画」「個別の教育支援計画」を作成し、個に応じた指導を推進	②地域との連携	②若葉ステージの定着
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)
学校関係者評価	①校内委員会を活性化させ、担任・学年及び保護者を支援する具体的な手立てを100%近く提示することができていた。	①新たな施設面の借用・授業実の共有・情報共有は進まなかった。中学校入学時に100%の情報共有をする。	①②ともに、児童アンケートの肯定的評価は楽しい・達成感ともに85%にとどまったが、保護者は90%以上である。関係者評価では100%の高評価を得た。
	②支援を要すると思われる児童に対して「個別指導計画」「個別の教育支援計画」は100%に至っていないが、充足の方向へ進んだ。	②復活した健全育成行事や地区協行事へは管理職が100%参加し、適宜教職員も加わることができた。	
各教室で一人一人の特性に応じた教員による声掛けがされており、子どもたちは安心して学習することができていると感じる。スクールカウンセラーやボランティア等、外部機関との連携及び活用を図ることで、学校だけで抱え込まず進めてほしい。一人一人の子どもに応じた目標に向かって、個に応じた指導がなされている。 インクルーシブ教育に関して、当事者以外の子どもや保護者が理解を深める場があるとよいと思う。	隣接の第四中学校との連携による校庭及び体育館の敷地借用が、体育や休み時間での子どもたちの運動遊びの機会拡大につながっている。第四中学校生徒との交流学習が広がることで、小学生・中学生ともに学び得ることが多いと思う。 コロナ禍が終息しつつあり、地域との連携による取組の再開や、地域人材による体験講座(昔遊び・書道・スポーツ等)の開設で、子どもたちにとって有意義で体験的な学習の場が充実するとよい。	日常の体育学習の延長としての行事(スポーツ大会)であるとともに、仲間と力を合わせて頑張ったことによる達成感や充実感を一層子どもたちに味わわせる取組であってほしい。 若葉ステージは、自分たちが創り上げた作品であるとの子どもたちの自負が感じられた。主体的に取り組んでいる子どもの姿が印象的で、子どもも保護者も楽しめる行事である。引き続き、Withコロナの時代を踏まえた創意工夫ある活動を期待する。	

人材育成・組織運営	
自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主幹教諭の職層としての資質向上（主幹会や喫緊課題の解決を通して）に対して、学校ルールの見直し、教科担任制の導入、各学期1週間の授業公開などの取組を実現させている。</li> <li>・適材適所の配置により、意欲と達成感をもたせ、主任教諭の学校運営意識の向上を図ることが実現できたため、組織貢献の機会が増したり教員の自己有用感が高まってきたりした。主任・主幹教諭への昇任や管理職選考への意識を向上している教員も増加した。</li> <li>・支援・応援・指導し、全教職員の職務内容や教育実践を実現させ、子ども第一主義の自立した教職員へ育成を目指してきたことに対して、新たな取り組みや組織運営を意識した提案が増加した。</li> </ul>
学校関係者評価	<p>教科担任制や交換授業を全学年で進めようとしていることは有意義と感じる。大人同士にも相性があるように子どもと先生にも相性があるもの考える。子どもにとって、様々な先生が関わってくれることは幸せなことと思うので、引き続きチームで子どもたちに向き合うことを大切にしてほしいと思う。</p> <p>授業でのICT機器（タブレット端末等）の活用に関して、教員の能力による差が生じているように思う。</p> <p>問題や困難な状況・場面が生じた際に、教員一人が抱えるのではなく、チームとして全体で共有し解決していくことを今後も大切にしてほしい。</p>

中期的な経営目標の達成状況
<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域運営学校（コミュニティスクール）への準備</li> <li>○ポスト・コロナにおける学校文化や教育活動の「不易と流行」の判断</li> <li>○若葉小・四中合同校舎使用（R9完成予定）に向けた準備</li> </ul>
次年度の重点課題
<p>若葉小学校の笑顔が増えるために、子ども第一主義と良好な学習集団づくりを進める手だてとして</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①多様性・人権感覚に対する学校全体での意識の向上 <ul style="list-style-type: none"> <li>・改定生徒指導提要の理解と活用</li> <li>・命の教育の充実</li> <li>・学校規則の見直しの習慣化</li> </ul> </li> <li>②小中連携教育の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>・四中との施設連携に加え、学びの連携</li> <li>・教科担任制の充実</li> </ul> </li> <li>③体育健康教育の推進 <ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の実践の充実</li> <li>・教員の協働の充実</li> <li>・研究成果による他校への還元</li> </ul> </li> <li>④様々な教育政策、児童保護者地域の要請、教職員の自己有用感の向上や自己実現のために働き方の改革 <ul style="list-style-type: none"> <li>・職務の見直しや精選</li> <li>・適材適所</li> <li>・デジタル化</li> </ul> </li> </ol>